The New President Interview

新社長に聞く

安全対策進め収益基盤強化

丸紅建材リース 内山 元雄氏

▽内山元雄（うちやま・もとお）氏＝77年京大法卒、丸紅入社。10年執行役員プラント・産業機械部門長、13年常務執行役員欧州・CIS支配人丸紅欧州社長、15年常務執行役員南米統括丸紅ブラジル社長兼丸紅ウルグアイインターナショナル社長。好きなものは「酒と映画と猫と妻」。丸紅ではプラント分野での仕事が長く海外経験は豊富な分、「国内での仕事はあまりしたことがなく楽しみ」と語る。54年5月19日生まれ、静岡県出身。

重仮設大手の丸紅建材リースは、今期から3カ年の中期経営計画「成長への新機軸の創造」をスタートし、新規戦略投資の推進など3本柱の基本戦略で事業の成長を図る。6月下旬に就任した内山元雄社長に、就任の抱負と今後の展望を聞いた。

――就任の抱負を。

「丸紅での40年弱のほとんどを海外案件を担当して過ごしたため、国内の重仮設事業という分野は全くの白紙でのスタート。業界の第一印象としては、社会にとって非常に大事な仕事だと感じた。属人的な信頼関係を築くことも重要な仕事で、お客様や特約店、協力会社などのみなさまと真面目に、誠実に、率直に付き合っていきたい。当社の社員も真面目でしっかりした人が多い。これまでの会社生活では主に化学プラント関係の仕事をしてきたが、継続した付き合いが重要という部分は共通しており、業界のカルチャーには割と馴染めそうだと感じている」

――足元の環境認識と今後の見通しは。

「東京オリンピックを控えているが、現時点でわれわれの業界の仕事は本格的には動いていない。ただ、今下期から来期にかけては本格化するとの期待感を持っている。首都圏以外でも大阪、九州、名古屋などでも資材の追加発注が予想より早く出てくるなど、少しずつではあるが上昇カーブを感じてきている。2020年までは良いという意見もあるが、東京オリンピック以降も首都圏を中心とした地域の再開発は進むだろうし、海外からの観光客がこれだけ増えている中でインバウンドによる経済効果とそれに伴う建設需要はしばらく続いていくだろう」

――今期から新中期経営計画がスタート。

「前中計のテーマは『成長へ向けての礎の構築』だったが、前期まで5期連続の増収増益で来た中で礎を作る作業は終えた。今中計は『成長への新機軸の創造』がテーマで、ワンステップ上に向かって進んでいこうという計画。3つの新機軸の中で『持続的成長に向けてのインフラ整備』は重要で、その中でも特に安全対策の推進と労働災害の撲滅を図る。従来以上に工場や現場に投資していくが、投資ありきではなく、まず最前線である現場でしっかり問題点などを抽出し適切な対策を講じることが大事だ。そのために、年1回以上は全国の工場に行き工場長と話し合いを行っていく。安全対策を充実させながら、『コア事業のさらなる収益基盤強化』に努め、さらに成長していくための『新規戦略投資の推進』を図っていきたい」

――新規戦略投資について、投資対象に関する考え方は。

「当社の仕事の考え方は基本的にグリーンフィールドだが、商社的な視点ではブラウンフィールドへの投資も考えていきたい。われわれの事業と関連した分野で、ある程度の成果と成長が期待できる事業を選定していきたい。全くの未知の分野ではなく、自分たちで可能性を判断できる、手が届く範囲内での事業を想定している」

――海外展開について。

「すでに投資しているタイと中国の事業をしっかり地に足が着いたものにしていくことが最優先だ。インドネシアは政権が変わったタイミングでチャンスだとは思うが、現地では良いパートナーと組むことが大事なだけに、少なくとも1―2年は見極めが必要。新興国の経済成長に減速気配がある中、勢いで海外に出ていく時期ではないと見ている」

「35%株主である丸紅というチャンネルは他社にない強みで、特に海外におけるノウハウと経験が役に立つ。貴重な情報源であり、現地でのパートナー候補との関係においても有用だ。国内では開発建設のセクションを通じて、情報力やゼネコンとの関係強化などで力を借りていきたい」

――人材の確保も重要な課題。

「女性やシニア層の積極的な登用に加え、外国人の活用も視野に入れていく必要がある。例えば溶接工で日本人並みの技能を持った職工は東南アジア各国におり、視野を広げて考えていきたい」

――材工一式受注に関する考え方は。

「ゼネコンから材工での要望が強くなっている中で、設計・工事会社としての力をどんどん鍛えていかなくてはいけない。需要家の要望に応えたものだが、自ら積極的にセールスポイントにできるように強化していきたい」

（伴野 隆馬）